



TITLE:

御挨拶

AUTHOR(S):

西原, 宏

---

CITATION:

西原, 宏. 御挨拶. 静脩 1984, 21(1): 1-2

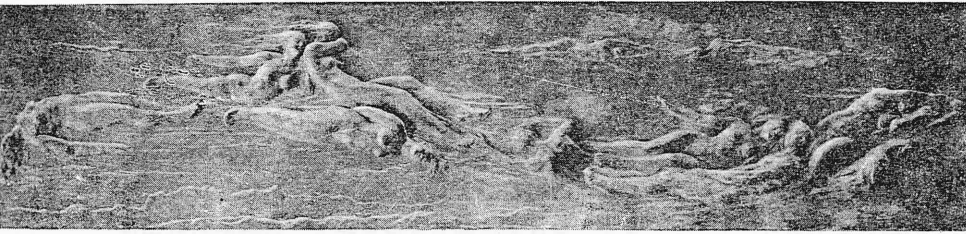
ISSUE DATE:

1984-06

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/36927>

RIGHT:



# 静脩

1984年 6 月

The Kyoto University Library Bulletin

Vol. 21, No. 1

## 御 挨 拶

附属図書館長 西 原 宏

このたび、4月2日付で附属図書館長に就任いたしましたので、御挨拶を申し述べます。前館長の高村仁一先生は、京都大学の長い間の夢の一つであった美しい装いと豊かな機能を具えた図書館を完成されました。そして伝統を誇る京都大学のアカデミズムが一層の光彩を放つのに新しい図書館を役立て、それに伴って鮮明な図書館像を確立することを、図書館職員の努力の目標として遺されたのでありますが、その具体化の道は決して容易ではないと覚悟いたしております（『京大広報』号外、1984.4）。各位の御理解と御支援を心からお願いする次第であります。

附属図書館のあり方については、昭和39年に創刊されて以来の『静脩』の各号に、数々の提言や要望が寄せされており、読み返してみても感銘を受けるものが少なくありません。堀江保蔵館長は「創刊のことば」のなかで、「蔵書のための図書館から利用者のための図書館へ、ここに大学図書館近代化の基本的な問題がある。この問題の解決には利用者側の理解と協力が絶対に必要である。例を指定書にとって見ても、これは教官の学生に対する学習指導上の事柄であって、図書館はそれに協力する立場にある。一般に文献・資料を蒐集整理し、情報活動を活潑にして、積極的に利用者に奉仕しうる態勢を整えることは図書館の仕事で

あるが、この仕事は、個々の教官、各教室、各部署の理解と協力を得て、はじめて完全なものになる」と書いておられます。図書資料の選定、収書については、堀江先生のお言葉の精神を継承したいものと考えます。

創刊後まだ間もない昭和41年には、舟岡省吾名誉教授（故人）が「文献検索の機械化を望む」のなかで、「斯様な図書館（医学図書館のこと）が新設されるに至った意義の一つとして、若い学徒の文献検索の修練道場が狙い所であろう。今日の訪問者がやがては卓越した研究者に、又は実地医家に育成し、今日の努力が後日偉大な業績の完成の基となるのが望まれているに違いない。然し私が目撃する所は若い研究者が不慣れな文献渉猟に非常な努力と貴重な時間を消費している事実である。若し適当な方法が工夫されて是等の若い人々に文献渉猟の便宜を計ることができれば、鋭気の青年研究者の貴重な時間を節約し得、実験になり、臨床観察になり、又は実験成績の整理なりに振り向けることができる。こんな効果を期待するためには種々の方法があるだろう。その一つとして最近注目されてきた電子計算機の利用を考えてみては如何？」と電子計算機の導入を提案しておられます（『静脩』Vol. 2, No. 5）。先生はさらに、文献複写のサービスを加え、図書館活動を日本全

国は言うに及ばず世界に拡大することを提言されたのであります。附属図書館は、先生が年来の希望を述べられてから20年近い歳月を経て、漸くその方向に整備されつつあります。

湯川秀樹先生(故人)は、『静脩』の同じ号に「勉強すること」と題する一文を寄せられ、先生が大正15年の春、京都大学に入学されて最初に感じられたのは「いかにも大学らしい静けさであった」そしてそれから40年たって「学生数は何倍かになり、新しい建物が次々とできていった。空地も少なくなった。人の往来も激しく、建築工事の騒音も絶えない。このように変貌してゆく大学の中で、精神を集中させることは容易でなくなった。今の学生諸君は気の毒だと思う」と書いておられます。そして、「京大の付属図書館もずいぶん立派になり、便利になった。何はともあれ、学生時代に勉強しておくことである」と結んでおられるのであります。先生がこの文をお書きになってから18年以上経ちましたが、「人の往来」を「車の往来」と読み替えれば、そのまま今日のことを言っておられるように思えてなりません。新しい図書館の閲覧室が大学らしい静けさを保ち、そのなかで学生諸君が勉強に集中できることを心から願っ

て止まない次第であります。

さて、新しい図書館には、教育・研究の支援機構としての任務を積極的に果たすために、充実した施設と、利用上の様々の工夫が用意されております。すなわち、学生を中心とした学習図書館としての役割に加えて、研究図書館、保存図書館および総合図書館としての機能充実が図られております。具体的に例を挙げますと、全学的な計画に基づく高額参考図書の集中配置、バックナンバーセンターの設置、化学系新着雑誌の集中配置、国内外の主要図書館の所蔵する文献資料の提供、テレックスによる研究情報の交流などであります。さらに今年度中には、新しい電子計算機を導入して、全学的な図書館情報処理センターとしての機能を具えるとともに、東京大学文献情報センターと連繋して、全国的な学術情報システムの一環として図書館活動の総合化をはかり、また地域センターとしての役割を果たすことになる予定になっております。各位におかれましては、教育・研究の支援機構としてのこの図書館を十分に御活用頂きますよう、お願い致します。以上をもって就任の御挨拶にかえさせて頂き度いと存じます。

## 閲覧・貸出業務について

新しい図書館の2階全スペースを占める開架閲覧室には、現在約4万冊が配架され、利用者が探し出した資料を手近かな席で自由に読むことができる「完全開架制」がとられています。4月の新館開館と同時に、この開架図書を簡単な手続きで館外にも貸出しができるよう、電算機による貸出処理を始めています。これによって、本年4月の貸出冊数が、昨年同月の約2倍になったにもかかわらず、貸出・返却処理がスムーズに行われています。以下、電算化により、運用上変更になった事柄を中心に閲覧・貸出手続等についてご紹介いたします。

### 1) 貸出冊数と期間

図書の貸出冊数と貸出期間は下表のとおりです。

	開架図書		庫内図書	雑誌	庫内図書及び雑誌貸出可能冊数 (計)
	冊数	期間	期間	期間	
教 官	5 冊	2 週間	1 か月	2 日	30 冊
名誉教授、院 生、事務官	5 冊	2 週間	1 か月	2 日	10 冊
学 部 学 生	5 冊	2 週間	2 週間	2 日	5 冊

上記以外の者についても、それぞれ貸出冊数、期間が定められています。